

『諸禮大學』について

山崎 晴恵

往来物は、平安時代後期から明治期までの約 900 年間に 7000 種以上編まれ、各種写本を含めると数万種を数えるとされる。生活文化を知る上で貴重な資料にも関わらず、現在往来物についての研究は進んでいるとは言いがたい。特に、江戸時代の生活で重視された礼儀については研究が遅れている。そこで、本研究は、往来物の中でも『諸禮大學』に注目し、それに取り上げられた礼儀について、他の複数の往来物の礼儀の記述と比較検討し、礼儀の中で何に重きが置かれているか、どのような特徴があるのかを明らかにしていく。

まず、『諸禮大學』を翻刻・現代語訳をした。次に『諸禮大學』を「食礼大学」と「諸礼大学」に分け、それぞれ「躡の端」と比較した。「食礼大学」と「躡の端」とでは、語順や言葉の差異、省略または補足があったが、大きな意味の違いは無い。「諸礼大学」では、起居進退の礼儀について纏められ、「食礼大学」同様、大きな意味の違いは無い。平仮名と漢字、単語や語順で多少の差異はあるが、『諸禮大學』は殆どが「躡の端」と酷似していた。そのため、『諸禮大學』は「躡の端」の引用である可能性も考えられる。但し、「躡の端」を直接引用したかまでは不明である。「躡の端」から『諸禮大學』の成立の間、もしくは「躡の端」の成立前に、同様の往来物が刊行されて、それを引用した可能性も考えられる。

「諸礼大学」と「明倫」との比較と考察をし、ここでも多くの類似の箇所が見られた。このことから、中国の童蒙教育が日本に伝わり、この「明倫」を参考に「諸礼大学」が書かれたか、「食礼大学」同様、別の往来物や書籍を参考に書かれた可能性が考えられる。

『諸禮大學』の折形の図と『童子諸禮躡方往来』の「万折形大体」に注目すると、折形や熨斗は、様々なバリエーションが見られ、大体何が含まれているのかが分かる程度に載せられていることが分かる。現代も残っている折形もあれば、その時代だけにしか見られない折形もあった。

本稿全体を通して、食についての礼儀作法が多く見られた。それだけ、“食の礼儀”が重要視されていたのであろう。同じ題材の記述でも重きを置くところはそれぞれ異なり、作者の主観が多く入っているように思われる。

今後の課題としては、より多くの礼儀の記述のある往来物や、明治時代に書かれた“小学作法書”や、中国の儀礼書などを比較していくことが挙げられる。

(指導教員 綿拔豊昭)